

その湖の色と、周囲の昭和新山、有珠岳、湖水のはるか北の羊蹄山と、入道雲の出た、からつとした空の色とが混ざり合い、油絵より日本画的雰囲気をかもし出している。

この神秘的な風景に、手を合せて、何か自然にすがりたい、魅せられた気持になつた。この思いをそのまま、いつまでも心の奥に秘めていたいものである。

八班 上野・熊本・志村・谷川
齊藤・城野・小森・北岡

北海道の印象

短食2の2

せせこましいごみごみした、雑踏の中に意識するともなく、吸い込まれてしまっている事に慣れつこになつていた私は、北海道の広大な美しい素朴さに、じかに触れてふと今までの自己と言うものを、振り返つて見ずにはおれない様な気がしたのである。

岸に寄せる波の色が、そのまま砂に染み渡りはしないかと思われるほどに、青く澄み、樹々の葉や自然の花には、汚れを知らぬ子供の様に、芽生えた時のままの色を保ち、その上には、果しなくどこまでも空が続いている。

これは何処のことなのであろうか。日本にもこう言つた、心の安らぎを感じさせてくれる場所があつたのか等と、感激しながら観望したのである。

普段は1日に何十人、何百人となく、見知らぬ人とすれ違い、それらを強いて見ないでおこうと意識すらして歩くのに、この国では、畑に立つ人、路々を歩く人、山を切り開くおじさん、みやげ売のおばさん、一人一人が印象深い。他人よりもテンポの遅い私は特にこの様なのんびりした繰り返しが、たまらなく魅力に感ぜられるのであつた。

しかし峠に立つアイヌ人、白老のアイヌ部落の人々は、都会の中の孤独な、淋しい人々の集まりを、そのままポイと摘んで持つて来た感じを我々に与えてくれた様である。

7月も終り近くだと言うのに、全く涼しい快適な旅を楽しむことができ、想像をうらぎるところか、よりいつその感銘を与えてくれた北海道の素晴らしい自然、この良さが、失われることなくいつまでも残つておいてほしい。又、神秘の摩周湖も、いつの世も変わる

ことなく、謎を秘めたあの碧さを失わないでいてくれます様に……

工場見学記

豊年製油株式会社見学

短食2の2 湯浅正子

原料大豆から油になるまでの工程を見学しましたが、大豆がほとんど全部アメリカからの輸入品であること、そしてその大豆の貯蔵庫であるタンクがコンクリート作りであつたので少し驚きました。

今まで貯蔵タンクといえば、金属で出来ているものしか見たことがなかつたからです。なぜコンクリート作りであるかということは、コンクリートは、断熱の作用をするからとのことでした。他にもまだ理由はあると思います。貯蔵タンクから、破砕機、抽出機、ミセラタンクへと行き、出来上つた原油が、種々の工程によつて多くの異つたものとして出来上ることに対して興味を覚えました。

製造工程において、もつと近代的な設備をしたらと思つたところもありましたが、長年使用し、まだ使用出来るし、新しいものにするとしても莫大なお金がかかるので、少々のことでは無理であると思ひました。

製造された油が罐あるいは瓶などに詰められているのを見て、ちよつと期待はずれの感がありました。大きな部屋の中に油を用器に入れる機械がるつほどしかなかつたこと、そしてもつと大きな機械かと期待をしていたことです。でもこれは私の、油を製造するという観念が、オートメーション化されていて、牛乳を作つているのと同じ様に考へていたのが大きな間違いであつたと思ひます。

製造された油が、原油として工業用にそして白絞油、サラダ油として食用に、又、多種多様の用途に使用されていることを知り、今までは食用油だけしか知らず、又それ以上知